

# まさきぎの恵みを 探しに行こう

これまで、「松前町」を積極的に前面に出して

PRしてこなかった本町。

町内の事業者と連携して

ブランド力向上と魅力発信につなげようと

愛媛県の協力を得てプロジェクトを始動しています。

町をPRするために本当に大事なものは

松前に住んでいる、松前で活動している皆さんです。

今月号をきっかけに

まさきぎの「恵み」を、一緒に再発見していきましょう。



# ま さ き 町

## ●ロゴマークのコンセプト

町名の「松前」は「まさき」とは読みにくいことから、可読性と意味性を兼ね備えています。

松前町は、旧松前町、北伊予村、岡田村が合併したまちであるという歴史を3つの円で表現。3つの色は、「芽吹きの麦と季節の緑」の緑、「豊かな水とめぐみの海」の青、「実りの麦と町花ひまわり」の黄です。

## ●ロゴマークの使用

ロゴマークを町民の皆さんと共有し、さまざまな場面で活用してもらうことで、「松前町」を全国に発信していきます。

使用許可申請など詳しくは、ホームページをご覧ください(総務課企画政策係 ☎985-4103) までお問い合わせください。



①ロゴを使ったグッズでレイアウトしたブースに、大勢の人が集まりました ②③試食で弾む会話。商品だけでなく、まさきを語る事ができました ④ロゴシールを貼った商品

# 「まさき」PR 名古屋から始動

1月30日から2月5日までの一週間  
愛知県名古屋市の名鉄百貨店で開催した  
「愛媛・まさき町うまいものフェア」。  
松前町の地名度アップに向け、  
官民一体となってPRしました。

「いらっしゃいませー。愛媛の松前町からやってきました。いかがですかー」  
名古屋市内の名鉄百貨店に、町内の事業者、町職員、県職員の声がかかります。これまで「松前町」を前面に出したPRを積極的に行ってきた本町。町内の事業者と連携して、ブランド力向上と魅力発信につなげようと、愛媛県の協力を得てプロジェクトを始めています。その第一弾として取

り組んだのが、「愛媛・まさき町うまいものフェア」です。(株)龍宮堂、(株)つるさき食品、(有)加納海産、(株)つるさき食品、(株)世起の町内5業者が参加し、生産量日本一の小魚珍味、ちりめん、麦みそやお菓子などを販売しました。  
フェアに訪れた松本相子さん(松前町出身)は、「チラシを二度見しました。『愛媛の松前町が単独で名古屋で物産展?』って。北海道の松前町の間違いかと



思った」と驚いていました。全国では、知名度が低い松前町。しかも「まさき」とは読みにくいいため、「まさきちょう」と覚えてもらいにくいのが現状です。そこで、読み方を強調した、地域ブランドの核となるロゴを作成。ロゴマークを使ったのれんなどでブースをレイアウトし、全ての商品にロゴシールを貼って販売しました。  
インパクト抜群のブースには、「まさきちょう?」と、大勢の買い物客が足を止めました。  
主婦の尾形純代さんは「初日に買って、子どもが喜んで食べたから」とリピート購入。商品購入者の中には尾形さんのように、また

来てくれるリピーターも多く、松前の味は大勢の人の心をつかんだようでした。ギノーみそ(株)の東浦晃さんは「名古屋は赤みそ文化。不安もありましたが、好評でよかった」と話していました。  
売り上げは100万円程度でしたが、商品単価の平均が300円程度だったことを考えると、一週間で3000個以上の商品を販売したことになります。  
出展業者も、自社商品を売るだけでなく、各社が互いに協力しながら販売し、まちをPR。ブースのレイアウトが統一されたように、そこには全員でまちをPRするという統一された意識がありました。



本村出身  
亀井洋志さん  
加寿子さん

チラシを見て松前のうまいものって珍味のほかに何だろうと思って来た。いろんな商品があって驚きました。懐かしかったです。



鶴吉出身  
山本進さん  
捷子さん

松前から出て40年以上。何年たっても懐しく、ちりめんなどたくさん買いました。松前の味を友人にも届けたいです。



名古屋市  
高木佳穂里さん  
斉場三枝さん  
尾藤千恵美さん

フェアではいろんな商品が安く、買いやすくてよかったです。ちりめんもげんこつ飴も全部おいしくて、まさきおいしいものばかりだと思いました。



名古屋市  
尾形純代さん  
惟将くん

普段好き嫌いが激しい子どもですが、ミルクいりこは臭みがなくよく食べました。愛媛に海のイメージがなかったので、新たな発見でした。



(株)世起  
今村暢秀さん

1社で売よりみんなで一緒にしたほうが活気が出るし、とてもいい取り組みだと思いました。フェア後、商品を買った人から注文の電話もありました。



(有)加納海産  
出海満祐さん

ギノーさんのひしおを乗せたちりめんを試食していただき、どちらも好評でうれしかった。「うちの町ではこうして食べる」と提供することが大事だと思いました。



ギノーみそ(株)  
東浦晃さん

今回のフェアに1企業として参加できてうれしいです。名古屋は赤みそ文化。麦みそに不安もありましたが、好評でよかったです。



(株)つるさき食品  
尾崎隆司さん

いつもは問屋に卸すので、消費者に直接売って勉強になりました。話すことで松前もPRできました。ホームページを開かれるなど反応は良かったと思います。



(株)龍宮堂  
三好正次郎さん

単独という不安がありましたが、県と町のバックアップや地元仲間と一緒に取り組んで心強かった。リピーターもできたのでさらにかんばります。

# 特産品は

# まちを楽しむサンプル

特産品にはさまざまな背景、人の営みや思いがあります。それを知ることが、そのまちを知ることにつながります。

名古屋の販売では、ただモノを売るのではなく、対面して、会話して特産品の説明を通して、まさきを語ることで、まさきを語ることで、名古屋の人にさらに興味を持ってもらうことができました。

つまり、特産品を手にしてももらうことは、まちのサンプルを手にしてももらうようなものです。その特産品の背景にある物語を知ってもらうことで、モノの価値を高め、まちの魅力をアピールすることができるようになります。

ここでは、今回の名古屋のフェアで販売した「小魚珍味」の物語と、麦みそ、ひしお、げんこつきなご飴の原料の「裸麦」を紹介します。



## おたさんが広げた珍味

瀬戸内海の豊富な漁場に面し、ちりめんやいりこなどを使った小魚珍味の生産が盛んな松前町。現在、その加工生産量は全国シェアの大半を占めており、日本一を誇っています。松前町で珍味がつくられるようになったのは、今から約100年前のこと。浜田佐太郎が、小魚に味をつけて乾燥させた「儀助煮」をつくって売りはじめたのが、松前の珍味の始まりと言われています。その儀助煮を売り歩いたのが、女性行商人「おたさん」。松前町が珍味の産地になったのは、おたさんが国内はもとより海外にも販路を拡大したことによります。

おたさんは、京風の黒羽

## 小魚珍味



行商で北海道に出向きました。「雪が残る4月ごろに北海道に渡り、寒さが厳しくなる12月まで、道内で行商をしていました。函館、倶知安(くつちゃん)、千歳、北見、稚内と、いろいろな場所に行きました」とキヨカさん。

かんづめ行商は、まず背中にかついでいる一斗缶に詰めた珍味を試食してもらい、気に入ってもらえたら松前から商品を取り寄せて販売しました。松前の珍味は品質が良く、味が優れていたため、一度買った客がお得意さまとなり、商品はよく売れたといえます。

キヨカさんは「行商は楽しかったですが、幼い子と1年のほとんどを離れて暮らすのは

身を切られるようなつらさでした」と振り返っていました。「長いものぞまさきのかずらつるは松前で 葉は松山へ花はお江戸の城に咲く」という歌は、勇敢に困難を排除して行商に励む松前のおたの心情をよく表しています。

## おつまみからヘルシー食品へ

珍味は酒のつまみというイメージがありますが、近年はカルシウムが豊富なヘルシー食品として注目を集めています。地元の産物と伝統の味を知るという意味もあり、町内の小中学校では、大豆いりこやさきいかの衣揚げなど、さまざまな珍味を給食に取り入れ

ています。創業から100年を超える老舗(株)龍宮堂は、いりこにミルクやココアをまぶしたり、温州みかんで味付けしたりと、新しい味の小魚珍味を売り出すなど、「小魚珍味ファンを獲得したい」という意気込みが伝わってきます。

松前の珍味を全国へと広げたおたさん。胸を張って売り歩いた人がいれば、幼子と離れるつらさに涙しながらも歯を食いしばって行商した人もいました。そんなおたさんたちの汗や涙が、松前町の小魚珍味の礎を築いたことは間違いありません。そして、現代の人々が、アイデアを駆使し、未来へと受け継がれる商品を生み出しています。



山口キヨカさん

浜・88歳  
21歳のときからおたをしていたキヨカさん。  
若いころは北海道まで行商に出掛けた

## 裸麦



愛媛県産の裸麦は、平成23年産で25年連続生産量日本一。中でも松前町の生産量は778トン。西条市に次ぐ2位生産量を誇ります。現在、134戸の農家が合計約200ヘクタールで栽培しています。松前町の面積は2032ヘクタールなので、まちのおよそ10分の1で裸麦が栽培されていることになりました。自らの命とひきかえに麦種を残した義農作兵衛の心を受け継ぐかのように、今なお盛んに栽培されている裸麦。町内には、毎年春になると若葉色、初夏になると黄金色の麦畑が広がります。

長い歴史がある伊予神社が好きです。こうした場所を大勢の人に知ってもらうため、地域のボランティア案内人がいるといいですね。 山宮満安さん

伊予神社



### 「季節を感じる畑」

畑に休みなく、季節を感じる野菜が植えられているところが素敵です。向井由美さん

エミフル

松前の人は親切

松前公園

みんな優しい



エミフルに全部そろっているので買い物が助かるし楽しいです。村上真璃音ちゃん / 松前の人はよく挨拶してくれてとても親切です。向井梨々流ちゃん / おもいっきり遊べる松前公園が大好きです。金子叶樹ちゃん / みんな優しいです。三村妃杏輝ちゃん



### 「町が小さく家庭的」

小さな町だからか、家庭的で、何でも取り組みやすいと思います。山崎はるみさん

義農作兵衛に加藤嘉明：偉大な人物がいますし、高忍日売神社や金蓮寺など、たくさん文化財があり、松前は見るどころがたくさんあります。清水勝義さん

義農作兵衛



子育て支援

### 「子育て支援が充実しているところ」

子育て支援センターのサークル活動が充実していて、託児サポートもあってありがたいです。町外の人によく「いいね」とうらやましがられます。大西京子さん 瑛仁くん



### 「温かくてまち全体が家族みたい」

松山から引っ越してきました。みんなとっても温かくてすぐに仲良くなれました。まち全体が家族みたいです。渡邊晴世さん 真由ちゃん



### 「特別なことはないけれど住みやすい」

特別なものがあるわけではないけど住みやすいです。「こんなにいいところはない」と、先日老人会で町外から来た人が言っていました。大西勉さん 博子さん

住みやすい



### 「裸麦、レタス、ネギ、珍味…いいものいっぱい」

産直市など、県内でもいろいろなところに出て松前産をアピールしてほしいです。名物お母さんがいると盛り上がりそう。滝澤章司さん 智子さん

「全体的に住みやすい」人も環境もよくて全体的にすみやすいです。でもPR不足なところは満足ではないですね。例えば水を生かして地域づくりをするとか、仕掛けていってほしいですね。井上憲二さん



# 私が思う まさきの「いいね！」

裸麦や珍珠以外にも、まちにはたくさん魅力があるはず。自慢の場所、必ず渡す手土産、素敵だと思ふことなど、町民の皆さんが思うまさきの「いいね！」を聞きました。

町民に聞きました

畑にいっぱい広がる麦が広がる、緑色と黄金色のじゅうたんがきれいだと思います。 瀧原颯人くん

裸麦



松前町に引っ越してきたばかりですが、水が安くておいしいのにびっくりしています。 渡邊紀子さん 千洋くん

水



交通が便利

山がなくて見渡せる景色

お土産にはちりめん

エミフル

水が自慢

祭り



### 「お祭りなどの地域の伝統行事」

地域の伝統行事に活気があって、たくさんのひとが参加しているところがいいと思います。私たちが神崎の獅子舞をしていました。これからも続けてほしいです。窪田渚さん 奥村菜穂子さん



豊富な水が自慢ですよ。大西多美子さん エミフルができて便利に！丸山和子さん 大阪の親戚へのお土産はいつもちりめんです。大西千秋さん 篠崎美知子さん 別府恵美子さん

「季節を感じる親水公園はまちの自慢」

親水公園



松前町の自慢の場所は、季節の花々が楽しめる親水公園。こんなにきれいな場所、もっとたくさんの人に利用してほしい、お友達を誘うようにしています。垂水美都里さん 足立カズエさん 久保帛子さん

### 「温かい人情」

若い世代からお年寄りまで、みんな温かく接してくれるので、年齢に関係なく友人が増えました。 上田翔太さん



### 「ひまわりバス」

ひまわりバスがまちの自慢だと思います。自転車が乗れなくなった高齢者にとって欠かせないもの。本数を増やしてほしいです。上野純子さん 川上暁美さん



# もつと知りたい まさぎの恵み

町民の皆さんが教えてくれたまさぎの「いいね！」に興味を持った人も多くは。そんなまさぎの魅力を徹底追求。昔からまさぎに住む人も、最近越してきたばかりの人も、要チェックです。



## 水

重信川をはじめ、国近川、大井手川、大谷川など多くの河川が流れ、水辺空間に恵まれた松前町。これらの水は、古くから生活用水、農業用水、工業用水として人々の暮らしを支え、松前町の歴史を築いてきました。まちなかに水とふれあえる空間があるだけで、私たちの心は安らぎ、和みます。松前町は、このような親水空間を誰もが利用できる憩いの空間として整備しています。「生きるために」はもちろん、暮らして潤いをもたらず水は、私たちにとって大切な「宝」です。

松前町は、瀬戸内海に面し、気候は1年を通して温暖です。道後平野の肥沃な大地と豊富な地下水に恵まれ、米、裸麦、ネギ、レタス、イチゴのほか、さまざまな農作物が栽培できます。恵まれた土地で、農家が丹精込めて作る松前産ブランド米「松前育ち」は、名古屋のフェアで無料配布したところ、そのおいしさに驚いた買い物客から問い合わせがあるほどの人気でした。



農家の多くが、稲作の裏作として、麦やその他の農作物を栽培していて、畑には常に旬の農作物が植えられています。4月に広がる麦の緑など、一年中緑が絶えない景観は他の地域にはない特徴です。

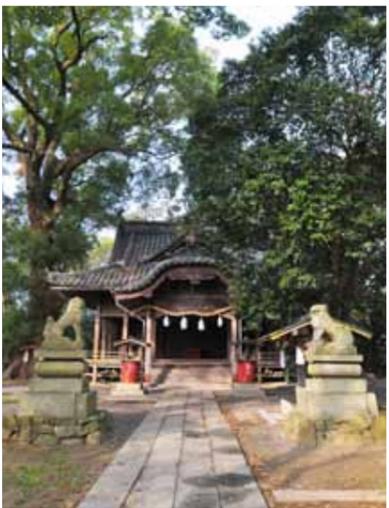
## 季節を感じる畑



## エミフル MASAKI

松山市の近郊に位置するという立地条件を生かし、長期的に町勢を発展させるため、町が誘致。平成20年4月、中四国最大級のショッピングセンターとしてオープンしました。県内外から大勢の人が訪れていて、休日平均4万5千人、多いときは7万人もの人が訪れています。

約190の専門店と食料品・医療品などを扱うスーパーマーケットで、EMIFUL MASA SAKIの敷地内にある「まさぎ村」では、地元の新鮮でおいしい農作物や海産物などを販売しています。エミフルができたことで、ますます松前町は、町民一人一人が笑顔で生き生きと住み、働き、学び、憩い、楽しむことができる生活自立のまちへと飛躍しています。



## 伊予神社

愛媛の延喜式大社7社のうちの1つ。千鳥破風の唐破風で飾られた屋根の構えは壮大で、長洲大工が造った拜殿正面の彫刻

の素晴らしさは有名です。「入らずの森」と呼ばれる林の中に、鎌倉時代の五輪の塔があり、貴重な文化財が出土しました。北伊予校区で学生時代を過ごした人なら「写生大会をした思い出がある」という人も多いはず。歴史的な環境に小さいときから触れることは大切なことです。思い出深いと大切にしたいと思う心が育ちます。松前には多数の文化財があり、それらに触れる機会があります。



## ひまわりバス

県下20市町で最も人口密度が高い松前町。20km<sup>2</sup>で面積は広くありませんが、光あふれ、水も緑も人情も豊かな住みよいまちです。誇れるまちをつくってきた大切な高齢者が、安心して買い物や病院に出掛けられるように、4コース1日8便、ひまわりバスが走っています。「まちの自慢はひまわりバス」という高齢者が

多いということは、ひまわりバスで出掛ける元気な高齢者が多いということです。松前の人は、輝きながら松前で老い、健やかに暮らしています。バス車内では、「はじめまして」の人とも会話を弾ませる乗客が多いことも、印象的です。





恵み、めぐるまち、まさき

「身を犠牲にして幾百人の命を救うことができたら私の本望である」  
多くの人々の命と村の農業を大飢饉から守るため、自分の命と引き替えに麦種を残した作兵衛。人々から義農として追慕され、その功績は今なお語り継がれています。  
作兵衛の生き方を見習い、のちの世にも伝えようと、明治24年には義農神社を建て、毎年4月23日には義農祭を行います。

義農作兵衛



先人への畏敬と感謝を絶やさず、その心を大切にしてきた歴史が、素直に「ありがとう」と感謝できる心、「次は私が」と奉仕できる心をつくっています。

温かい人情

まさきには、愛情と人情があります。自然と四季が創り出す情緒ある風景は、まるで母のふところに抱かれたような安らぎを与えてくれます。そ

んな愛情と人情と風情にあふれ、町全体が家族のように暮らす「まさきの日常」は、それ自体がまちの魅力です。

まちの魅力を広める取り組み



松前町文化協会は、協会創立30周年記念事業の一つとして、「松前えーとこ60選かるた」を制作しました。町内の3校区から20ずつ、文化財や名所などを選び、読み札は、小中学生や町民から公募した500余りの中から採用。絵札は文化協会の西公民館絵手紙部の協力で作成しました。

矢田弘副会長は「松前のいいところを風化させないために、みんなで共有して保存していこうというのがかかる制作の目的です。今後は、3世代交流かるた大会、文化財ツアー、絵葉書、紙芝居などに展開し、忘れられないようにしたい」と話しています。

プロジェクトに使用しているキャッチコピーは、「恵み、めぐるまち、まさき」。  
今回、名古屋でのフェアで特産品を売ることで、「まさき」をPRすることの効果も少なからず感じられました。外の声を聞くこと、交流することは、私たちのところを、まちを、豊かにします。特産品を介して、まさに松前の恵みが人と人との心を巡った瞬間でした。

では松前の恵みとはなんでしょう。それは、目に見えるモノだけでなく、その背景にある歴史や風土、人情など、地域に暮らす私たちの物語なのです。その物語をめぐらせることで、より豊かな恵みをもっとと広がついていくのです。

そのためにはまちの人がまちのことをもっと知っていなければなりません。「恵み」を知って、磨いて、語る。そして、共に語れる「まさきファン」が一人でもたくさんいると心強いものです。  
地域ブランドは、その地域で生きる人の生活そのものです。ファンを増やしながら、豊かに暮らす自分たちの姿を、見せる化していきます。そうすれば、より豊かな恵みが、より広く、より深く、めぐっていきはります。